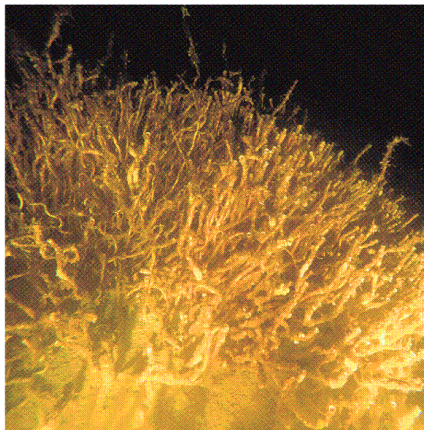




①鹿児島湾に生息するサツマハオリムシ。このような群集が点在しており、時には山のように大きくなる②水槽のサツマハオリムシ。赤いえらを棲管から出している。



サツマハオリムシ

学名 *Lamelibrachia satsuma*

1993年に鹿児島湾の奥、水深82mの海域で発見され、97年に新種とされた。後に駿河湾や北マリアナ諸島でも確認されている。

ミミズやゴカイのなかまで、普段は棲管（チューブ）から赤いえらだけを出している。ハオリムシのなかまは一般に、深海の熱水噴出域や湧水域など硫化水素が豊富な海域に生息し、大群集を形成する。世界で約20種が知られており、日本周辺には他にサガミハオリムシなどがいる。

成体は口や消化管がなく、体の中に共生するバクテリアが硫化水素を使って作る栄養を利用し、生きている。その生態やバクテリアとの共生メカニズムは生命進化の謎を解く鍵とされ、科学的にも注目されている。

毒を“食べて”生きる

ほとんどの動物は、魚のように自ら動いて餌を食べ、消化、吸収することで栄養を得ています。しかし、中にはほとんど動かず、毒を餌代わりに“食べる”者もいます。

その変わり者は「ハオリムシ」といい、世界中の深海底に20種ほどが生息しています。鹿児島湾にもサツマハオリムシという種が住んでいて、世界で唯一、水深200m以下

り浅いところで見られるハオリムシのなかまです。ハオリムシは、深海の海底にある温泉の周りなど、特定の場所にしか住みません。温泉から噴き出す熱水などに含まれる硫化水素を“食べる”からです。硫化水素は普通の動物にとつては食べることはおろか、近寄ると窒息を引き

起こす猛毒として知られています。それを“食べる”ハオリムシには秘密があります。実は口がないので、本当に硫化水素を食べるわけではなく、えらや体の表面から硫化水素を取り込み、血液を通して体の中に共生するバクテリアに渡します。バクテリアは硫化水素を使って、水中の二酸化炭素から栄養を合成します。

共生によつて新しい能力を持つことは、進化を大きく進めるために重要だといわれます。ハオリムシは、今まさにそれが起きている、とても面白い生きものなのです。かごしま水族館では生きたサツマハオリムシを展示しています。難解だけれど、面白い変わり者、ハオリムシをぜひ見に来てください。（展示課魚類展示係・八巻鮎太）

おもしろ生き物図鑑

かごしま水族館から